



CGS Annual Report

小樽商科大学 グローバル戦略推進センター 年報



特集

ギャップイヤープログラムの取組と
その進捗について

2024

CGS Annual Report 2024



センター長より

学長・グローバル戦略推進センター長 穴沢 眞

今回のアニュアルレポートでは2021年に設置されたグローバルコースが実施しているギャップイヤーを特集として取り上げました。グローバルコース自体は20名の定員で設置され、経済学科と商学科に10名ずつが所属するものです。英語による専門教育や交換留学生のための短期留学プログラムで提供される英語による授業を中心に履修する、“英語を学ぶ”のではなく“英語で学ぶ”コースとなっています。このグローバルコース入学者のうち5名をギャップイヤーの対象者とし、彼らは1年間入学を猶予され、海外での研修を行います。当初はハワイ大学のみを派遣先としていましたが、現在は派遣先がニュージーランド、オーストラリア、マレーシアなど多様化してきています。ギャップイヤーは国立大学では本学のみが導入した制度であり、今後のさらなる国際化のなかで、この制度をどのように活かせるか、本学のみならず我が国の大学教育に関わる事例になると思います。

また、本学では概算要求において、CGSにグローバル・コモンズ及びリカレント教育推進室を設置することとしていました。

グローバル・コモンズは、これまでCGS内にあった部門長会議を発展的に解消し、これを母体としたグローバル・コモンズ共創会議を新たに設けました。この会議体はグローバル・コモンズの運営に関わるもので、外部のステークホルダーとの関係構築や学内でのCGSを中心とする活動の主体となるものです。また、この会議の下にグローバル・コモンズクリエイティブサロンを置き、教職員が自由に集まり、意見交換する場としました。これまでのCGSの活動のなかで常に課題となっていた部門間の融合や教職員の参加を強化するものとなることを期待しています。既に1名の専任教員を雇用し、グローバル・コモンズの活動の中心となるユニバーサル・ユニバーシティ構想のもとでの3つのプラットフォームの推進に注力していただいています。

また、リカレント教育推進室はCGSの新たな室として設置しました。2025年7月には新たに1名教員が赴任することになっており、さらにもう1名の採用を予定しています。本学はこれまでビジネススクールを中心として各種のリカレント教育を実施してきましたが、今後、18歳人口が減少するなか、ユニバーサル・ユニバーシティ構想のもとでのリカレント教育など、社会人に向けたリカレント教育の将来的な活動範囲を拡大することを想定しており、その中心的な役割を担うことが期待されています。

目次

グローバル戦略推進センター（CGS）のあゆみ	P2
特集 ギャップイヤープログラムの取組とその進捗について	P7
各部門の主なトピックス	P17
グローバルプロジェクト採択・実施事業	P23
グローバル基金のご案内	P24
データ集・CGS関係予算収支	P25

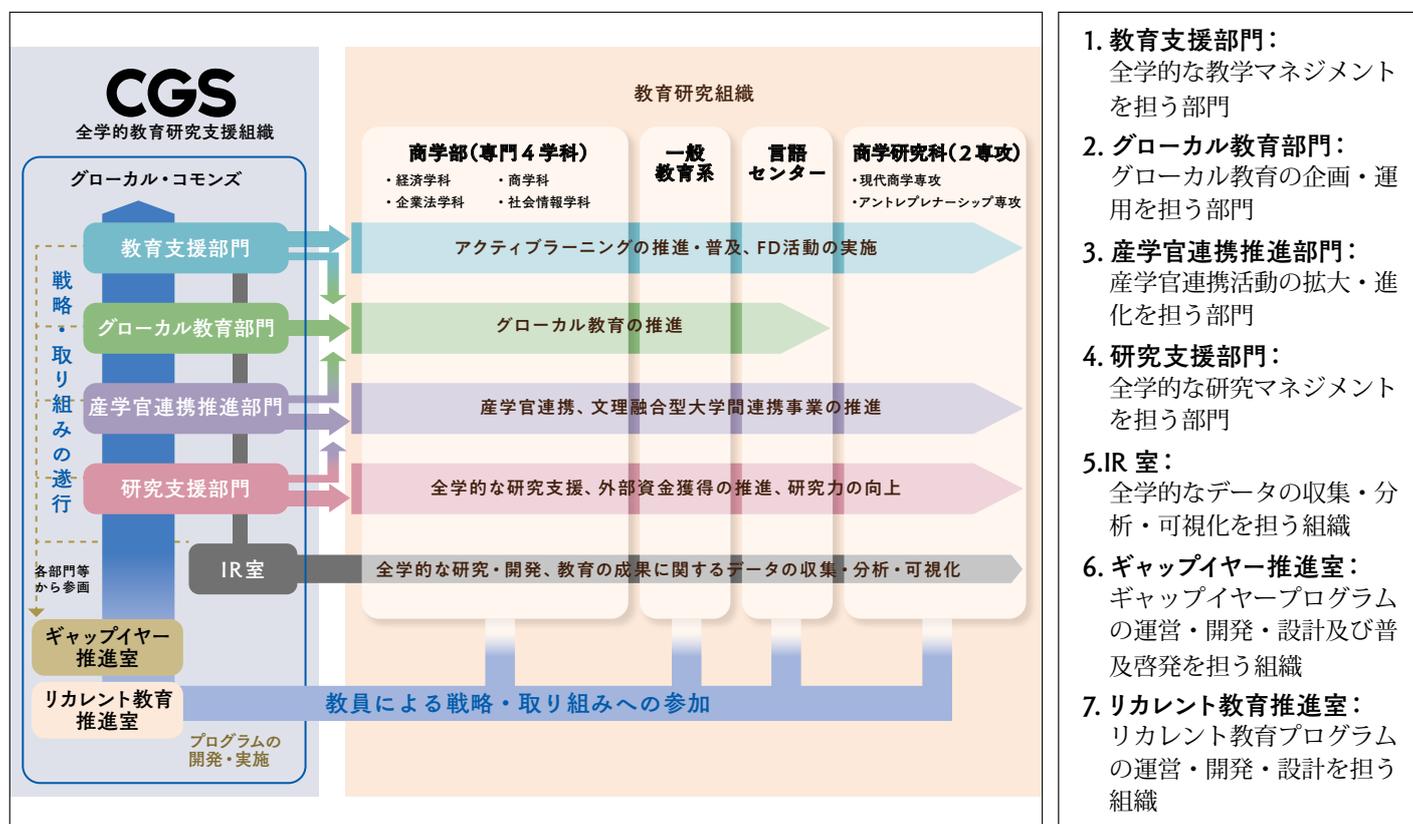
グローバル戦略推進センター (Center for Glocal Strategy : CGS) のあゆみ

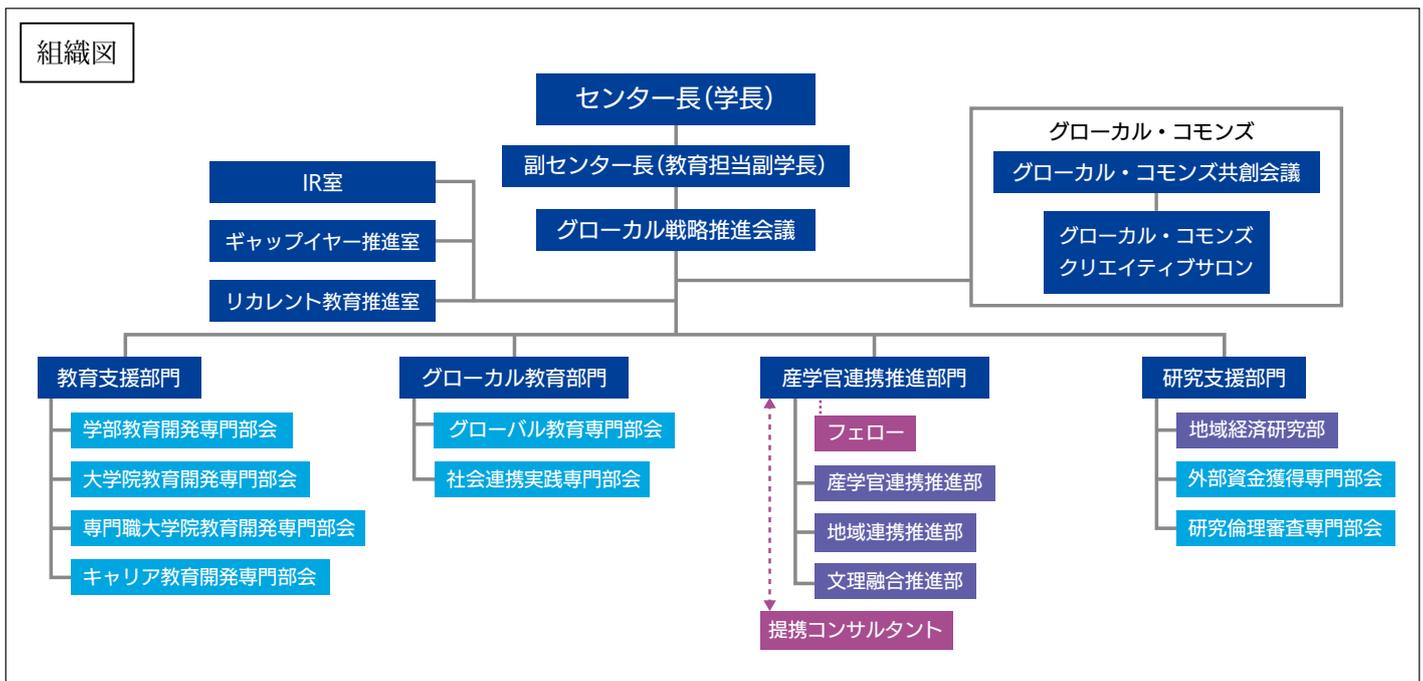
小樽商科大学は2016(平成28)年度からスタートした第3期中期目標期間のビジョンとして「グローバル人材(グローバルな視点から北海道経済の発展に貢献できる人材)の育成」を掲げ、このビジョンを実現していくため、2015(平成27)年4月に新たな全学的教育研究支援組織としてグローバル戦略推進センター(CGS)を設立しました。2016(平成28)年4月には、既存の教育開発センター、国際交流センター及びビジネス創造センターの機能を統合し、本格的に稼働しました。

CGSは、本学がこれまで蓄積してきた財産というべき実践的な教育方法(教育開発センター機能)、国際交流(国際交流センター機能)、産学官連携ネットワーク(ビジネス創造センター機能)を相互に連携・融合させ、本学が掲げるビジョンについて、司令塔としての役割を担います。2019(令和元)年度には教学IR(Institutional Research)室(現IR室)を設置し、本学における教育に関する研究・開発、教育の成果に関するデータを収集・分析・可視化し、その調査結果を用いて本学の教育活動の更なる発展に資する体制を整えました。2022(令和4)年度には、これまでグローバル教育部門が担ってきたギャップイヤープログラムについて、新たなプログラムの開発や運営を行うため、ギャップイヤー推進室を設置しました。ギャップイヤー推進室には、CGSの他部門・室の構成員が参画することで、国内外の他大学や地域との連携による新たなプログラム構築や、その教育効果の検証を行うことが可能となりました。

CGSの部門紹介

CGSは、以下の4部門及び3室(令和7年3月リカレント教育推進室新設)で構成され、それらを令和7年3月に新設されたグローバル・コモンスにおいて、情報の一元化、各部門・室の連携を図る体制となっています。これらの組織が連携し、全学的なセンターとして、北海道における経済活性化の拠点となることを目指します。





グローバル・コモنزの設置について

1 はじめに

2025年3月の教育研究評議会において、本学グローバル戦略推進センター（CGS）に新たな機能として「グローバル・コモنز」を設けることが決定されました。これに伴い、議論と交流の場として「グローバル・コモنز共創会議」および「グローバル・コモنزクリエイティブサロン」が設置されました。

グローバル・コモنزは、大学の教職員・学生をはじめ、企業や自治体など本学の多様なステークホルダーが連携し、共に議論を深めるための共創空間です。今後はこの取り組みを通じて、CGSの戦略策定機能を一層強化し、北海道から世界に広がるさまざまな現代的課題の解決に向けた実践的なアプローチを進めていきます。

2 これまでのCGSの成果と課題

CGSは、本学の第三期中期目標・中期計画における重点的な取り組みの一つとして2016年4月に設置された組織です。CGSは、従来の「国際交流センター」、「ビジネス創造センター」、「教育開発センター」という三つのセンターを統合し、さらに研究支援機能を加えることで、教育・研究・社会連携を包括的に担う中核的な組織として位置づけられています。

これまでの3センターは、それぞれ国際交流、産学官連携、教育改善の分野で重要な役割を果たし、本学の教育研究活動の発展に大きく寄与してきました。しかしその一方で、これらのセンターは学部・大学院教育とはやや独立した形で運営されていたため、各センターの活動が全学に十分に共有されず、関係教員以外との連携が限られるという課題も抱えていました。

こうした背景を踏まえ、大学全体としての戦略的な教育・研究の推進体制を構築する必要があるとの認識のもと、すべての教員が主体的に関与できる新たな組織としてCGSが創設されました。CGSは、大学を取り巻く急速な社会変化や地域課題、そしてグローバルな動向に柔軟かつ力強く対応するためのハブとして、学内外のリソースを統合し、本学のグローバルな使命の実現を目指しています。

CGSでは、設立以降、教育・研究・社会連携の分野で総合的な戦略を策定・推進する体制の強化が図られてきました。その一環として、新たに「IR室（Institutional Research 室）」、「ギャップイヤー推進室」および「リカレント教育推進室」の3室が加わり、センターの機能はさらに拡充されています。

CGSでは、アクティブラーニングやブレンデッドラーニングの導入・普及、FD（ファカルティ・ディベロップメント）活動の実施、キャリア教育の展開など、教育の質的向上を目指した多様な取り組みを進めています。また、日本人学生と外国人留学生の共学を促進し、海外および国内での体験型・長期型学外学修を含む「グローバル教育」の実践にも力を入れています。

さらに、日本で初めての本格的なギャップイヤー制度の導入や、地域産業界・自治体・他大学との連携による「ビジネス開発プラットフォーム」の形成、道内理工系大学との大学間連携事業など、広域かつ多層的なネットワークの構築を通じて、地域と連携した教育研究を推進しています。

研究面においては、学内公募型の地域志向型研究プロジェクトの支援や、科学研究費助成事業など外部資金の獲得支援、研究会・講演会の開催支援などを通じて、地域に根ざした学術的貢献を深めています。さらに、大学の意思決定支援に向けた先進的な IR（インスティテューショナル・リサーチ）活動として、データベースからの自動抽出システムを活用した情報分析にも取り組んでおり、CGS は今後も教育・研究・地域連携を包括的に支える中核組織としての役割を果たしています。

CGS は、教育・研究・地域連携の各部門においてすでに顕著な成果を上げてきました。しかし、社会が大きな転換期を迎える中で、今後は新たな課題への対応が強く求められています。

その最大の課題の一つは、少子化による 18 歳人口の減少です。学部教育の重要性が変わらない一方で、今後の日本社会の持続的発展の鍵を握るのは、大学卒業後の 20 代後半から 70 代にかけての世代における「生涯にわたる能力向上（リカレント教育）」です。この背景のもと、全国の大学には、社会人の学び直しやスキルアップを支援するリカレント教育の中核拠点としての役割が期待されており、本学も例外ではありません。

小樽商科大学は、2022 年に帯広畜産大学および北見工業大学とともに北海道国立大学機構を設立しました。実学を基本理念とするこの三大学は、北海道の地域課題に応じた高度なリカレント教育の提供を社会的使命とし、連携・協働を進めています。

こうした社会的要請と機構の方向性を受け、本学ではこれまでビジネススクール、産学官連携部門、図書館などが個別に担ってきたリカレント教育機能の一つに統合し、2024 年に「リカレント教育推進室」を新設しました。この新たな教育拠点は、今後の教育戦略の核として位置づけられています。

これと同年に設置されたのが、グローバル・コモンズです。グローバル・コモンズは、大学内外の多様なステークホルダーが自由に議論し、協働するための空間として、持続可能で創造的な社会の実現に向けた知的交流の場となることを目指しています。

3 グローバル・コモンズとは何か？

「コモンズ (commons)」とは、もともと「共有地」や「共有資源」と訳される概念であり、日本では里山や入会地などがその代表例とされています。社会科学、とりわけ経済学においては、Garrett Hardin が 1968 年に提起した「コモンズの悲劇 (tragedy of the commons)」という概念が広く知られています。

この「悲劇」のストーリーは次のようなものです。誰でも自由に牛を放牧できる共有の牧草地に、次第に多くの人が牛を持ち込むようになると、一頭あたりの牧草の量は徐々に減少し、最終的にはすべての牛が十分な栄養を得られず、やせ細ってしまう——というものです。これは、個々の合理的な行動が全体として非効率をもたらすという、経済学でよく取り上げられる典型的な事例です。

しかし、実際のコモンズはこのような単純な構図では語れません。現実には、共有資源の利用には明示的・暗黙的な多くのルールが存在し、ときには一定の強制力をもって資源の管理が行われています。さらに重要な点は、参加者全員がコモンズによって得られる利益を理解し、その維持と持続可能性のために協力し合うという社会的な協調が成り立っていることです。

CGS が推進する「グローバル・コモンズ」も、こうした実践的なコモンズの理念に立脚しています。多様なステークホルダーが共に知見を持ち寄り、ルールを築き、責任を共有しながら持続可能な価値を生み出す空間として、知的協働の基盤を築いていきます。

グローバル・コモンズが生み出す最大の価値は、革新につながる新たな知識です。この空間には、教員・職員・学生はもちろんのこと、本学に関わるすべての人々が参加することができます。それぞれが自身の経験や専門知識を持ち寄り、自由に意見を交わすことで、多様な視点が交差し、今までにない知的発見が生まれます。

議論を通じて創出された知識は、参加者それぞれが持ち帰り、自らの実践や活動に活かすことが可能です。ただし、この場に参加するには、一方的な傍聴者ではなく、自身の知識を何か一つでも共有するという姿勢が求められます。

グローバル・コモンズは、大学から社会へ一方的に知識を提供する場でも、社会から大学が支援を受けるだけの場でもありません。互いの立場を超えて知識を出し合い、共に考え、共に創る——そのような「知の共創空間」として、CGSの中心的な役割を果たしています。

4 直近の課題

小樽商科大学および北海道国立大学機構では、2030年までに北海道全域に高等教育の機会を届けることを目指して、「ユニバーサル・ユニバーシティ構想（UU構想）」を掲げています。この構想のもと、2024年度末までにすでに道内7か所に拠点整備され、各地の地域社会からはさらなる支援と展開への期待の声が寄せられています。

北海道が抱える課題は、農業をはじめとして複雑で多様性に富んでおり、これらの解決には、大学と地域社会、行政、企業、金融機関といった多様な主体が緊密に連携することが不可欠です。

こうした背景をふまえ、CGS内に「グローバル・コモンズ」が設置されました。グローバル・コモンズは、大学内の教職員と地域の関係者がともに集い、課題の共有や解決に向けた議論・協働を進める場です。地域のニーズに応え、大学の知と力を結集して社会課題の解決に貢献することが求められています。

そのためには、まずグローバル・コモンズ自身の基盤を整えることが急務です。特に、CGSの各部門が、現在の大学とその周囲を取り巻く課題をどのように捉えているかを相互に理解し合うことが重要です。また、グローバル・コモンズが大学の戦略策定の中心的役割を担う以上、関係するメンバーが大学の予算構造や国のプロジェクトの方針など、制度的・財政的な背景を正しく理解する必要もあります。

このような目的から、2025年度には「グローバル・コモンズ勉強会」を毎月開催し、大学が直面する課題や概算要求などに関する基本的な情報の共有を進める予定です。勉強会を通じて、メンバーは「何が課題か」「自分たちに何ができるか」「どのような組織体制をつくれば、より効果的に課題に取り組めるか」といった点を具体的に把握し、実効性のある活動へとつなげていきます。

これまで、教授会以外で教職員同士が集まり、自由に意見を交わす機会は限られていました。グローバル・コモンズ勉強会は、そうした壁を越えて相互理解を促し、大学内ネットワークの再構築を促進することも期待されています。

グローバル・コモンズは、小樽商科大学がこれまで進めてきた「ユニバーサル・ユニバーシティ（UU）構想」の目標を実現するために、新たに設置された組織です。この構想の実現には、地域に根ざしたさまざまな課題を一つひとつ丁寧に解決していくことが欠かせません。グローバル・コモンズは、そうした課題に対して具体的な解決策を提案し、大学内外の関係者と連携しながら取り組んでいく、有機的で実践的な組織として機能していきます。

5 今後の発展に向けて

小樽商科大学では、第4期中期目標期間中の施設整備のキーワードとして掲げられた「イノベーションコモンズ」の理念を踏まえ、新たに「グローバル・コモンズ」を設置しました。イノベーションコモンズは、大学のキャンパスを多様なステークホルダーと共に「共創の場」として活用することを目的としたものです。本学もその理念を受け継ぎ、グローバルな視点から地域と連携し、課題をともに解決していく新たな拠点として、グローバル・コモンズを設立し、機能と内容の更なる充実を図っています。

まず活動の拠点となるのは、4号館1階にある「コラボルーム」です。このスペースはもともと、教職員と地域市民の交流を促進するために整備されたもので、一般的な教室とは異なり、自由にレイアウトが変更できる開放的な空間です。誰もが発言しやすく、対話や協働が自然と生まれるよう設計されています。隣接するミーティングルームでは、少人数での打合せや企画立案なども可能です。

当面はこのコラボルームを中心に、教職員や学生が自由に集まり、産学官金の連携による取り組みを進めていきます。さらに将来的には、外部資金の導入も視野に入れ、現在の大学会館の改修等にあわせて、より高度で効果的な協働スペースの整備を目指しています。新たに構想しているこの空間は、従来の大学施設とは一線を画し、企業との共同研究を行うスペースや、ネーミングライツを活用した広告展開、さらには学生が民間企業や自治体と直接つながることのできる場として構想されています。まさに、大学と社会を結ぶ「新しいかたちの大学」の象徴的な空間となることが期待されています。

近年、大学と社会との関係は大きく変化してきました。かつては、特に人文・社会科学系の分野では産業界との連携

が難しいとされてきましたが、現在ではすべての学問分野において、社会とのつながりや外部資金の獲得が重要な課題となっています。社会科学系の大学である本学にとっても、地域社会とともに課題に取り組み、社会的インパクトを高めることが求められています。

グローバル・コモンズは、こうした時代の変化に応える取り組みの一環として、社会と大学をつなぐ起点となり、社会からの理解と支援を引き出すことを目指します。そのためには、コモンズが単なるプロジェクトの場ではなく、そこに関わるすべての人々にとって「自分たちの場所」であり、「社会に必要とされる場所」であると実感される存在になる必要があります。

グローバル・コモンズが目指すのは、大学と社会が一方的な関係でつながるのではなく、誰にとっても当たり前が存在し、無くてはならない共創の拠点となることです。そのためには、内外との対話を重視していくことが肝要だと考えています。時代の転換点において、大学のあり方、大学人の意識のあり方をも変えるスタート地点となることがグローバル・コモンズを新たに設置した理由なのです。

グローバル戦略推進会議 - 本学の戦略を統括する審議機関 -

本学の戦略を全学的に推進するための審議機関です。学長が議長となり、各部門の活動の統括、学外からの声を大学構想への反映、大学学内に向けた改革状況の情報発信などを行っています。また定期的に、各戦略の進捗状況や各部門の活動状況等を確認し、戦略を着実に実行する役割を担っています。

CGS 各部門の体制（単位：名）

		教育支援部門	グローバル教育部門	産学官連携推進部門	研究支援部門	IR 室
部門長・室長		大津 晶	プラート カロラス	玉井 健一	沼澤 政信	沼澤 政信
副部門長		田島 貴裕 西出 崇	池田 真介 小林 広治	北川 泰治郎	石川 業	西出 崇
専任教員	教授	1	1	1		1
	准教授		1	2		
	助教・講師					
兼任教員	教授	11	14	3	67	2
	准教授	9	5	4	46	
	助教・講師				2	
学術研究員				1	1	
助手					2	
技術職員		1				
担当事務 (全体統括：企画総務課)		教務課	学生支援課国際交流室 教務課	企画総務課 研究・社会連携推進室	企画総務課 研究・社会連携推進室	企画総務課

※研究支援部門は全教員が所属

2025年3月末現在

※教員数は、他の部門にも所属する教員も含む

ギャップイヤープログラムの取組とその進捗について

CGS年報 2024 特集記事「ギャップイヤープログラムの取組とその進捗」によせて

プラート カロラス CGS グローカル教育部門長

CGSグローバル教育部門は、グローバル人材育成を使命とし、「グローバルマネジメント副専攻プログラム(GMP)」の運営や国際交流活動を推進している。2020年度にはGMPを発展させた主専攻「グローバルコース」を経済学科・商学科に新設した。本コースでは、独自のAO入試「グローバル総合入試」で選抜した学生に対し、英語による専門科目や海外留学の強い推奨に加え、入学猶予制度を活用した我が国でも先駆的な「ギャップイヤープログラム」を導入している。これらの取り組みを通じて、地域社会、ひいては我が国の発展に貢献するリーダーの育成を目指している。

本学がギャップイヤープログラムを導入した背景には、高校までの受験中心の生活から、大学での学びや将来を考える移行期間において、一度立ち止まり、自身と向き合う時間の重要性がある。特に、慣れ親しんだ環境(コンフォート・ゾーン)から踏み出し、海外という異文化環境で多様な価値観に触れる経験は、自己理解を深め、新たな問題意識を育む貴重な機会となる。本学では、参加学生の安全と学修効果を考慮し、海外大学等と連携した「プログラム型」のギャップイヤーを選択した。これにより、留学先で修得した単位を本学の卒業単位として認定できるメリットもある。

プログラムは2015年度の文部科学省補助事業「大学教育再生加速プログラム(AP)」採択を機に構想が始まった。2018年度にパイロットプログラムとして学部1年生1名をハワイ大学カピオラニコミュニティカレッジ(KCC)へ派遣し、その経験を基に制度を設計した。2019年度には入学猶予者1名を同大学へ派遣した。しかし、2020、2021年度は新型コロナウイルス感染拡大により、派遣候補者を選考したものの、やむなく海外派遣は中止となった。

パンデミックが収束に向かった2022年度には5名をKCCへ派遣し、プログラムを再開することができた。ところが、2023年度は急激な円安ドル高とそれに伴う現地生活費の高騰を受け、希望者全員が経済的な理由などで面接直前に辞退するという事態に直面した。

この経験を踏まえ、特定の国・地域への依存リスクを軽減し、プログラムを安定的に運営するため、「リスク分散型」の考えに基づき派遣先の多様化を図ることとした。KCCに加え、本学の海外協定校や教員のネットワークを活用し、新たにニュージーランド(アラ・インスティテュート・オブ・カンタベリー、オタゴ大学イングリッシュランゲージセンター)、オーストラリア(ウーロンゴン大学カレッジ)、マレーシア(当時はマラヤ・ウェールズ国際大学、後にマラヤ・ウェールズ大学と改名)を派遣先として開拓した。

その結果、2024年度はKCC、ウーロンゴン大学カレッジ、マラヤ・ウェールズ大学へ計6名を派遣することができた。さらに2025年度もKCC、ウーロンゴン、オタゴ大学へ計4名の派遣を予定しており、プログラムは安定的な運営軌道に乗りつつある。

本特集では、このギャップイヤープログラムが参加学生にどのような「効果」をもたらしたのかを検証する。2018年度以降に本プログラムに参加した学生(コロナ禍で派遣は叶わなかったものの、その期間に代替となる活動に積極的に取り組んだ学生を含む)が、ギャップイヤーという経験を通じてどのように成長し、問題意識がどう変化したのか、そしてその経験が卒業後のキャリアにどう繋がっているのか、彼ら自身の言葉で語る「体験談」を掲載する。これらの声を通して、本プログラムの意義と成果を、関係者の皆様にご理解いただければ幸いである。

ギャップイヤーの進捗状況について

小林広治 (CGSグローバル教育部門教授)

デバークヒラベ良子 (CGSギャップイヤー推進室准教授)

ギャップイヤープログラムは2018年度および2019年度の試行を経て、2020年度から本格始動する予定であった。しかし、この年から急激に猛威を奮い始めた新型コロナウイルス感染症の拡大により、ギャップイヤープログラムを含む本学における海外派遣留学は軒並み中止に追い込まれた。

2021年度

定員20名で4年間を通してグローバル教育を実施するグローバルコースが始まる時期であった。初めてのグローバル総合入試の合格者の中から、ギャップイヤープログラムへ参加する5名を選抜した。しかし、前年に引き続きコロナ禍の影響によりあえなく中止となった。

2022年度

まだまだコロナ禍の影響が残ってはいたが、それでも意欲のある5名の学生が選抜され、ハワイ州のカピオラニコミュニティカレッジに留学し、晴れてギャップイヤープログラムが本格始動した記念すべき年となった。

この時期はコロナ禍の余韻でリモートでの授業も多く、円安の影響により物価も高いなど、学業面および生活面でも様々な困難があったが、それでも5名の学生はそれぞれかけがえのない経験を積むことができた。

帰国後は「アロハサークル」を立ち上げ、ハワイ情報雑誌である「Lani Lani」に記事を掲載する等、ハワイ留学や文化交流を促進するための活動を続けている。

また、国際交流サークルにて活動したり、緑丘祭では留学生と協働出店したり、グローバルコース用のプロモーション動画作成に協力したりと留学の経験を活かして幅広く本学の国際交流に貢献していることは特筆に値する。

2023年度

当年度の派遣先はハワイ州カピオラニコミュニティカレッジのみであった。グローバル総合入試志願の時点で4名が参加希望していたにもかかわらず、面接直前に全員が辞退し、参加者はゼロとなった。

円安による経済的懸念、コロナ禍パンデミックが収束

して間もないこともあってか海外留学への不安がぬぐい切れなかったことも理由と考えられる。

2024年度に向けて、派遣先数の多様化にむけて新たに4つの教育機関と交渉に入った。まず、ニュージーランド、オタゴ大学イングリッシュランゲージセンターにはかねてより語学研修で在学学生を派遣しており、ギャップイヤー生の受入れも快諾いただいた。

二つ目は、同じくニュージーランド、クライストチャーチ市に位置する総合型ポリテクニク、アラ・インスティテュート・オブ・カンタベリー英語学校で、こちらは第二筆者との繋がりが縁で実現した。

三つ目のオーストラリア、ウーロンゴン大学カレッジも語学研修での実績がありギャップイヤー生の受入れにも積極的であった。

四つ目は、マレーシア、マラヤ・ウェールズ大学である。協定校であるマラヤ大学、イギリス、ウェールズ大学の間で締結された相互パートナーシップにより2013年に創立された私立大学である。ギャップイヤー生は大学入学準備のためのファウンデーション・プログラムに受け入れていただくことで合意した。

こうして、ハワイのみならず、オセアニア、東南アジアが選択肢として加わり、派遣先の多様化を図ることができた。

2024年度

派遣先の増加が好影響を及ぼしたのか、ギャップイヤープログラムへの応募者は増加し、面接の結果、6名が選抜された。オーストラリア、ウーロンゴン大学カレッジが3名、マレーシア、マラヤ・ウェールズ大学が2名、ハワイ、カピオラニコミュニティカレッジが1名となった。



2024年度ギャップイヤープログラム出発式兼奨学金授与式

ウーロンゴン大学カレッジでは、英語プログラムだけでなく、英語能力の条件を全員が満たしたため、英語・プラス・ユニ (English Plus Uni) プログラムにおいてウーロンゴン大学において正規のコースを受講し、現地学生と共に大学の授業を経験した。

ハワイ州、カピオラニコミュニティカレッジでは、夏学期は英語コースを、秋学期はハワイ文化に関連する授業や、ツーリズムなど、本人が興味のある科目を履修し、充実した学期となったようだ。

マレーシア、マラヤ・ウェールズ大学では、少人数クラス、留学生が少ない利点もあり、現地学生と親密な友好関係が築けたようである。また、学外での活動に積極的に取り組み、ボランティア、学生団体活動などを通して実践的経験も得られたと聞いている。このように、参加者はそれぞれ異なる派遣先で貴重な留学体験を得た後、無事帰国し2025年度入学を心待ちにしている。

現時点において、2025年度グローバルコース合格者からは、カピオラニコミュニティカレッジ(ハワイ)が2名、ウーロンゴン大学カレッジ(オーストラリア)、オタゴ大学イングリッシュランゲージセンター(ニュージーランド)が1名ずつ選出され、出発に向け準備を進めている。

総括

グローバルコース第一期生の江畑里桜氏はギャップイヤーについての卒業論文を執筆し、8名の関連学生および教員を対象としたインタビュー調査の結果、特に参加希望学生は入学前の探索的な学び、自己の成長、そして将来を見据えた視野を広げられることを期待していたことを明らかにした。

担当教員の視点から見ても、ギャップイヤーの成果は、参加した学生の成長、自覚の醸成、英語力の向上に加え、早期に留学を経験することで、その後の大学での学びや生活をより充実したものにできる貴重な機会を提供している点が挙げられる。

同時に、このことにより本学での国際交流にも重要な貢献をしていると考えられる。通常長期海外留学は2～3年次に行うことが通例となっており、学生は留学後に就職活動やゼミ活動に追われ、留学した経験を還元する機会は限られている。

これに比べると、ギャップイヤー学生は留学後に1年生として入学するため、その後4年間にわたり留学の経

験を還元する期間があり、それが国際交流サークルでの活動であったり、留学生との交流であったり、産学官連携に関する課外活動であったり、より多くの活躍の場が広がる。

一方で、江畑氏の研究では、経済的な負担およびギャップイヤーに対する社会的理解の不足が課題として挙げられている。担当教員としてもこれらの課題は認識しており、現在は奨学金等の経済的な支援を提供できているが、そうした支援がなければ、プログラムの継続は困難とみられ、持続可能性については今後もさらに尽力していく必要がある。

また、高校卒業直後の留学となるため、参加学生は色々な面で経験が十分でなく、海外での困難に直面しやすい。そのため、通常の長期派遣交換留学に比べ、大学としてもより手厚い教育的支援が必要となっている。

こうした課題があるものの、ギャップイヤープログラムは挑戦的に早期留学を経験することで自発的に学ぶ姿勢や思考を育み、将来的に変革する社会の要請に応えられる人財の育成に効果的であると考えられる。

2018年度ギャップイヤープログラム 参加学生から

片倉 玄太氏(日本航空株式会社)

2021年度卒

2018年ハワイ大学カピオラニコミュニティカレッジ(KCC)

2022年3月に小樽商科大学を卒業後、2025年2月から日本航空株式会社で客室乗務員として勤務を始めた。幼い頃からの憧れであった飛行機に携わる仕事に就くことができ、大変嬉しく、光栄に思う。このような機会に恵まれたのは、思い返すとやはりギャップイヤープログラムの留学経験が大きなきっかけだったと感じている。

私は2018年に小樽商科大学に入学した。当時は「卒業までに一度は留学してみたい」と漠然と考えていた。入学後にギャップイヤー試行プログラム参加学生募集の



2018年KCC正門前での一枚

掲示を見かけ、「1人だけなんて自分が選ばれるはずがない」と思いながら、試しに自分も応募してみた結果、派遣学生として

2018年8月からハワイで5か月間の留学生活を送ることになった。

現地では、英語クラス(ESOL)に加えて2つのクラスに参加した。外国語で学習することは決して楽ではなかったが、どのクラスも興味深く、期末テストは全て合格点を取ることができた。クラスが始まるとすぐに友人もでき、週末は彼らと出かけることも多かった。5か月間の留学生活は毎日が充実しており、あっという間に過ぎていった。

充実した時間の中でハワイを去る日が近づくにつれ、残された時間を意識するようになった。また、留学生活の最後まで価値ある時間を過ごそうと考えるようになった。留学を終えて小樽商大に戻ると、次は大学生活そのものに残された時間について考えた。4年で卒業しようとしていた私に残された3年間で、教養の修得に加えてさらにできる限り多くの経験を積もうと決めた。

そして2年次には、日々の授業の傍ら、日系航空会社が企画する米国カリフォルニア州でのインターンシップや、北海道で開催された高校生向けの国際サミットにファシリテーターとして参加するなど、学外での活動も数多く経験した。

大学での日々の国際交流活動などにも積極的に参加し、充実した大学生活を送っていたが、3、4年次は新型コロナウイルス感染症の流行により、大半の時間を自宅で過ごすこととなった。

予定していた台湾への留学も中止となり、PC画面に向き合う日々が続いた。就職活動もオンラインでの活動となった。飛行機と海外に関わる仕事がしたいと思っていたが、当時は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、航空業界への就職は叶わず、卒業後は地元の千歳市にある自動車部品メーカーに入社した。

そこでは海外とつながる仕事にも携わり、事業創造などにも挑戦することができ、楽しく多くのことを学ばせてもらったが、飛行機に関わる仕事がしたいという思いは消えなかった。紆余曲折あり、転職を経験し、自分の進んでいる道が正しいのか不安になることも多かったが、現在は飛行機に触れ、国内外を巡る客室乗務員としてのキャリアをスタートすることができた。

ギャップイヤー留学を含めてこれまでさまざまなことを学び、経験して成長してきた。分かりやすい成果としては、やはり英語能力の向上だろう。TOEICスコアは入学時730点だったが、卒業後は880点まで上がった。大

学で実践的な英語を学び、それを日常的に使っているうちに自然と力がついた。特に転職活動では英語力は高く評価された。

また、留学を経験したことで、以前より前向きに自身を捉えられるようになった。失敗しても、困難な状況でも、リスクを伴う決断をしても、自分が望む未来を実現できると信じ、やり抜く力がついたと感じている。

留学によって語学力をはじめ、コミュニケーション能力、行動力、自立心などのさまざまな能力やスキルが向上すると言われているが、私自身もその成長を実感している。

大学生活の始めにギャップイヤー留学があったことで、その後もより多くの経験を積み重ね、今日の充実した日々を過ごせている。

この素晴らしい機会を与えてくれた小樽商科大学と、これまで応援してくださった全ての方々から感謝している。そして、このギャップイヤープログラムから優秀な学生が輩出されることを楽しみにしつつ、これからもさらなる高みを目指していきたい。



現在の筆者

2019年度ギャップイヤープログラム参加学生から

村上 竜清氏(川崎重工業株式会社)

2024年度卒

2019年ハワイ大学カピオラニコミュニティカレッジ(KCC)

私は、小樽商科大学のギャップイヤープログラム2期生として、2019年8月から12月の約5か月間、ハワイ大学カピオラニ校に留学をした。私が本プログラムに参加した理由は、将来の夢ややりたいことがないことに不安を感じたためである。

高校在学時に大学志望校を選定する際、自分の夢や将来についてイメージすることができなかった。そこで、新たな世界を知り、人生の視野を広げた上で将来につい

て考える必要があると感じ、参加を決断した。

留学時には、ホストファミリーと国籍も世代も異なる人たちと一緒に暮らし、異なる価値観や視点を知ることができた。留学先では英語のクラス、観光(ホスピタリティ)に関するクラス、アート(陶芸)を学ぶクラスを受講した。ハワイ大学は、他にもウクレレのクラスなど、日本の大学にはない多様なクラスを受講できる点が魅力である。

留学を通じて得た学びは自身の強みとなり就職活動や現職での業務に活かされている。まずは語学力である。留学以前は単語や文法は理解しているものの、自分の英語に自信がなく、英語が出てこない苦しみを感しながらも、ホストファミリーや友人らと毎日会話を継続することで、3~4か月経過したころには、ストレスなく自然と口から言葉が出る感覚を得ることができた。

加えて、新しいことへのハードルが下がり、成長意欲が高まった。大学入学前に留学したことで、コンフォート・ゾーンから出ることが当たり前となり、メンタルが強化された。もがきながら自分なりの正解を見つけるために行動し、常に挑戦する習慣が身についた。

また、人生において重要な価値観が身についた。短い留学期間の中で、1日1日を大切に、目的に向かって最短で成長しなければならない環境の中で、時間と目的設定の重要性を理解した。さらに長期視点での逆算思考や効率性を追求する習慣が身についた。

また、ニュートラルな感覚が身につき、コミュニケーション能力が向上した。価値観の異なる多くの人たちと交流する中で、多様な価値観や視点を知り、物事を俯瞰した視点から客観的にとらえ、相手を理解し共感するコミュニケーションスキルが身についた。

帰国後はコロナ禍であったが、学びを活かし充実した大学生活を送ることができた。語学力を活かし通訳のアルバイトで、道内起業家の海外出張に同行した。また、エネルギー分野への興味から、外資系再生可能エネルギー企業でのインターンを経験した。プライベートでは海外に対するハードルが低くなり、20カ国以上を旅行で訪れた。このように、ストレスや恐れなく、自らコンフォート・ゾーンから出る習慣が身につき、新しいことに挑戦できるマインドに変化した。

現在は川崎重工業に就職し、海外営業部に配属され、中央アジアでのエネルギープラント製造に従事している。入社契機は、留学中の英語クラスでの再生可能エ

ネルギーに関する講義があった。現在、留学で培った語学力、ニュートラルな視点、他文化への適応力を活かして、中央アジアという商慣習の異なる厳しい環境でも活かされている。このように、就職活動及び現職での業務において、ギャップイヤーでの経験を活かすことができおり、まさに自分の人生を変えるものになった。本プログラムは、日本の学生にとって人生の可能性を広げるために必要不可欠であると確信している。



現在の筆者

2022年度ギャップイヤープログラム参加学生から (5名)

高畑咲来、永井柊子、羽原千晶、堀内菜月、松井彩奈
2022年度ハワイ大学カピオラニコミュニティカレッジ
(2023年度入学~在学中)

1. 授業、課外活動、日常生活など

私たちは夏学期と秋学期の2セメスターをハワイの学校で過ごした。夏学期は主にESOL94といった留学生向けの英語クラスを週4回受講し、主に英語での論文の書き方などを学んだ。毎週課題があり、厳しいと有名な先生のもとでの学習だったが、周りの友人たちとも助け合いながら最終的には5人全員無事そのクラスを合格することが出来た。

秋学期からはそれぞれ自分の興味がある分野の授業を自由に取って学習していた。フラダンスやウクレレ、ハワイ文化の授業など、ハワイならではの授業も沢山あり、普通の学校では体験できないようなことにも触れることが出来たととても貴重な経験であった。例えば、ESL100、スピーチ、ハワイ文化、ホスピタリティツールの授業を履修した。まだコロナ禍だったということもあり、出来るだけ対面で行われる授業を取るよう意識して時間割を組んだ。ESL100では夏学期に取ったESOL94よりも少し発展的な論文を書く練習を行いながらも、ディスカッションなども多い授業だった。

オーストリアや中国、ドイツ、ベトナムなどいろいろな国の留学生と意見を交わしながら学ぶことができる環

境は今までになく、とても刺激的だった。スピーチクラスは効果的なスピーチをする方法を学ぶ授業であり、クラスの8割がネイティブの学生であったため、コミュニケーションをとる際に難しさを感じ、文化の壁で困ることも多かったが、自分がマイノリティ側に立たないと感じなかったことや気づけなかったことにも出会えてとてもいい経験だった。

ハワイ文化やホスピタリティツーリズムの授業では、ハワイの観光名所やパワースポットに実際に行って授業をする課外学習が多かった。イオラニ宮殿へ行ってハワイ州が出来たばかりの時から歴史に触れたり、ハワイという島国がもつ神話など、スピリチュアルなことから文化的なことまで勉強した。また、オアフ島を一周するバスツアーを企画する授業内では、生徒自身が各スポットの紹介原稿を作成し、実際にバスで島を巡りながら自分たちでツアーを実施するという、実践的な学びを体験した。

授業がない週末は、学校の友達とハイキングやビーチに行ってハワイの自然を楽しんだり大好きなアサイーボウル巡りなどをして過ごしていた。ハワイで過ごした日々のおかげで自然のパワーやありがたさに気づくことが出来、日本では当たり前感じていた四季の美しさにも気づかされた。

2. ギャップイヤーで得たもの、成長したこと

ギャップイヤープログラムを通して、私たちが学んだこと、成長したことは主に2つある。

1つ目は、時間は有限であること、人に感謝することの大切さを改めて実感したことである。ハワイでの8ヶ月は長いようでとても短く、あっという間に留学が終わったという感触である。日本では、何気なくただ日常を過ごしていた。



滞在中の1コマ、5名で食事

しかし留学を経て、1日1日を大切に、目的を持って有意義に過ごしていくことの大切さを意識し、行動するようになった。実際に、留学中は放課後や休日といった空いた時間を利用して、ハワイの様々な観光地を訪れたり、ボランティア活動に参加したり、充実した留学生活を送ることができた。今まで見たことのない景色や建造物を見て、文化や価値観に触れたことで、感性が磨かれ、自分の興味関心と世界を広げることができた。

また、私たちがこのように実りある留学生活を過ごすことができたのは、あらゆる人のおかげであることを強く実感した。日本から金銭面、精神面ともに支えてくれた家族、理解できるまで根気強く教えて下さった大学の教授、友達、ホストファミリーなど、多くの人のおかげで今の自分があることを身をもって感じた。どれも当たり前前のことであるが、日本では考え直すきっかけがなかったため、それをもう一度意識することができたのは、価値ある時間であった。

2つ目は、「とにかくやってみる」という力が身についたことである。ハワイ大学マノア校の日本語教室ボランティアで、熱心に日本語を勉強している女性と出会った。その女性は日本語力を向上させるために、間違えていたとしても知っている言葉をとにかく口に出してみることを大切にしていた。彼女の失敗を恐れずチャレンジし続ける姿を見て、私たちも勇気を持って様々なことに取り組んで見ようと思うことができた。

それからは、大学の授業でより積極的にクラスメイトや教授に英語で話したり、学内のアルバイトに応募したりなどしたことで、飛躍的に英語力とコミュニケーション力を向上させることができた。この挑戦してみる精神は日本に帰国後の、サークルの立ち上げやハワイの観光情報誌「LaniLani」の執筆といった活動に生きていて感じる。

3. ギャップイヤーのメリット・意義

結論として、ギャップイヤーのメリットはこの期間を通じて様々な経験を積むことが出来る点にある。単なる語学研修ではなく、将来を見据えた積極的な自己投資と多様な経験を通して、人間性を豊かにし、社会で活躍するための力を養うことができる。

例えば、新しい環境や文化交流を経験することで自身について深く考える時間を得ることが出来る。また、ギャップイヤーは異文化理解を深める機会でもある。

異なる文化や価値観に触れることで、視野が広がり、国際的な感覚を養うことが可能となる。グローバル化が進む現代社会において非常に重要なスキルである。異文化理解は、将来の職場でのコミュニケーションや協力関係を築く上でも重要な要素となる。

ギャップイヤーの意義として、社会貢献の機会を提供する点も挙げられる。ボランティア活動や地域社会のプロジェクトに参加することで、社会に対する責任感や貢献意識が高まり、自己満足だけでなく、他者への思いやりや共感の心も育まれる。私たちはハワイで取り組んだビーチクリーニングボランティアや日本語講師ボランティア等を通じて自身の強みや弱みを学べたと同時に、将来のキャリア選択に対して広い視野で取り組むことに繋がっている。

このように、ギャップイヤーの期間を有意義に過ごすことで、将来の人生において大きなプラスとなることが考えられる。今後ギャップイヤーを考えている方は、充実した時間を過ごすため、自分の目標や興味に合わせて計画を事前に立てることをお勧めする。

4. LaniLaniでの執筆活動

私たちは、帰国後2023年の5月号より、株式会社P.M.A.トライアングルが企画する『Hawaiian Breeze LaniLani』というフリーマガジンに寄稿している。

本情報誌は羽田空港や東京のハワイ州観光局ほか、日本やハワイ各地のカフェ、レストランなどでも配布されている。これはギャップイヤープログラムに関連する初めての試みであったが、手探りながらも、ハワイの魅力を発信できるよう取り組んできた。本活動は、開始してから二年を迎えるところであり、現在まで計六号に寄稿してきた。これまでの企画内容としては、オアフ島の一日モデルコース、おすすめの知られざるお土産ショップ紹介などがある。いずれもギャップイヤーでハワイに滞在したからこそ伝えることができる、実体験に基づいた紹介となっている。

これらの企画の段階では、例えば、LaniLaniのターゲット層はどのような年齢のどのような趣味嗜好を持つ人々か、本誌としてのテーマは何かという分析をもとに、読者のニーズに合わせることを一つの目標としている。

LaniLaniでは、「プチ・ラグ」と称し、普段より少しだけ思い切った小さな贅沢を一つのテーマとしている。この点に留意しつつ、相応しい題材を選ぶことでターゲット

に的確にアプローチすることを心がけている。ギャップイヤーでの経験と入学後のマーケティングの授業での学修を実践に応用できる、貴重な機会になっていると言える。

今後の展望としては、昨年度のギャップイヤープログラムでハワイに滞在した新入生を迎えて、より話題性に富んだテーマでの執筆に取り組みたい。私たちの帰国から2年が経ち、新鮮な情報を届けることが困難になっているという現状がある。

今のハワイを知るギャップイヤー参加者と協働することで、既存のアイデアの範囲に収まらず、さらなる発展を目指して活動を継続していきたい。

5. ギャップイヤーの経験が大学生活・学修・人生に与えた影響と活かし方

約1年間、ギャップイヤープログラムを通してハワイに留学した経験は、大学生活や学修、そして今後の人生において、さまざまな形で生きていると感じている。まず、大学生活における影響として、異文化理解の重要性を強く認識するようになった。ハワイでは、多様なバックグラウンドを持つ人々と交流する機会があり、文化や価値観の違いを実感した。その中で、自分の意見を持ちながらも相手を尊重する姿勢が大切であることを学んだ。

この経験は、大学でのディスカッションやグループワークにおいても役立っている。異なる視点を理解しながら、自分の考えを論理的に伝える力が鍛えられた。次に、学修面での成長として、自律的な学びの姿勢が身についたことが挙げられる。ギャップイヤー中は、自分で学ぶ内容を選び、主体的に行動することが求められた。

例えば、英語のスキルを向上させるために、現地の人々と積極的に会話し、実践的な学びを取り入れた。この経験を通じて、「待つのではなく、自ら学びに向かう」姿勢が身につき、現在の大学の授業でも自主的に調査や学習を進める習慣ができた。また、人生における影響として、柔軟性と適応力の向上が挙げられる。

ハワイでの生活では、予定通りにいかないことや予期せぬ出来事に直面することも多々あった。しかし、その都度、状況に応じて考え方を換え、対応する力が養われた。

将来、国際的な環境で働くことを視野に入れているため、この適応力はキャリア形成においても大きな強みになると考えている。

今後、このギャップイヤーの経験をさらに活かすために、異文化コミュニケーションのスキルを深め、海外で

の活動やグローバルな視点を必要とする場面で積極的に挑戦していきたいと考えている。ハワイで培った価値観を大切にしながら、大学生活や将来のキャリアにおいて、この経験を最大限活かしていきたい。

2024年度ギャップイヤープログラム参加学生から (6名)

竹花釉衣、塚田桃子、平山由真
ウーロンゴン大学カレッジ(オーストラリア)
(2025年入学～)

ギャップイヤープログラムの概要

私たちはEnglish Plus Uniプログラムに参加し、4月から6月はカレッジにて英語学の授業を受講し、7月からは大学にてマーケティング原理とマネジメント入門を履修した。カレッジの授業では、ディクテーションやスラングの勉強、オーストラリアの歴史にも触れることができた。また、ウーロンゴン動物園や現地の小学校を訪れ多くの人と交流した。

7月からは、カレッジで現地生と同等の理解度となるように、サポート授業の開講をしてもらいながら、マーケティングとマネジメントの基礎について勉強した。

マーケティング原理の授業ではグループプレゼンテーションやオーストラリア製品の分析、未来の製品の提案等をした。マネジメント入門の授業では、リーダーシップやマネジメント理論を学び、現地、学生とともにディスカッションを行うこともあった。

また、放課後の活動としてはConversation ClubやJapanese English Exchange Clubに参加し、多国籍な学生達と交流した。課外活動にも積極的に参加し、ボランティアとして大会の運営や農家の手伝いもした。

日常生活では、ホストファミリーとフットボール観戦やサイクリングを楽しんだり日本料理を振る舞ったりす



ウーロンゴン動物園で蛇の触れ合いイベントに参加した様子

るなどし、学業と文化交流の両立を図った。

ギャップイヤーで得たもの、変わった・成長したこと

私たちがこのギャップイヤーで得たことは自立である。初めの頃は約半年間親元を離れて生活を送ることや、現地の人と思うようなコミュニケーションが上手く取れないこと等に不安を感じるがあった。

しかし、留学生活にはハプニングが付き物。月日が経つにつれ、何事にも冷静な判断を下せるようになった。そして、ギャップイヤーを終えた今、高校生までの私たちは、如何に予定調和な日々を過ごし、如何に気心知れた頼れる大人が傍にいたかを感じたのであった。

全ての選択肢が自分にある生活。イレギュラーが日々起こる中で、正確な情報を把握するために、こまめなメールのチェックや教授への確認、クラスメイトとのコミュニケーションをとらなければならない生活。

大人はもう、わざわざ教えてくれないということ。自分の責任は自分で取る経験を沢山したこと。これらをこの年齢で学んだことが、私たちがギャップイヤーで得た財産だと思っている。

ギャップイヤーのメリット、意義

ギャップイヤーの最大の利点は、自分と対話する時間を十分に確保できること、そして、自身がチャレンジしたいこと・興味あることに没頭し、確実に将来に生きる経験をできることだと思う。受験勉強が終わるやいなや大学に進学し、また新たな勉強がスタートする。エスカレーター式に進んで行けば自分が本当は何がしたいのか、大学の勉強を社会に出たときにどう活かしたいのかが不透明なままかもしれない。

ギャップイヤー制度は大学生活が始まる前に留学を経験できるため、留学に全集中でき、これからの大学生活での新たな志を持つことができる。そして、留学中に培った英語力は、既にワークショップやインターンシップ、アルバイト等で役立っている。

大学生活、将来への抱負

近い将来では、本制度で得た「英語で表現する力」がグローバルコースの授業に役立つだろうと考えている。本制度を経験する前の私たちは、その環境に飛び込んでさえしまえば、変わりたいように変われると思っていた。英語圏に飛び込めば、英語が話せるようになるといった

ように。しかし、現実には自分から話しかけに行き人脈を作らなければ、英語を話す機会には恵まれなかった。

この経験を通して、大学生活では自分からチャンスを探しに、そして掴みに行く貪欲さを忘れずに過ごし、将来へ経験を積み重ねていきたいと考えている。

ギャップイヤーで得た全ての経験は、私たち自身それぞれのアイデンティティとなり、将来の選択肢を広げる貴重な機会になった。

ギャップイヤー体験談

深見果央

ハワイ大学カピオラニコミュニティカレッジ
(2025年入学～)

私はギャップイヤー履修生として、ハワイのカピオラニコミュニティカレッジ(KCC)に8ヶ月間留学した。ハワイは温暖な気候で人も優しく、とても過ごしやすい環境だった。

私がハワイ留学を決めたのは、海外の文化に触れながら、英語を実践的に学びたいと思ったからだ。KCCはダイヤモンドヘッドのふもとにあり、自然豊かでのんびりとした雰囲気のある学校である。ワイキキの中心までは徒歩40分ほどで、ビーチやショッピングモール、美味しいご飯屋さんにも近くにあった。学校帰りによく友達と出かけたのも思い出に残っている。

KCCでは、年間の授業が春・夏・秋の3つのセメスターに分かれており、私はそのうち5月から始まる夏学期と、9月から始まる秋学期に参加した。KCCは授業の種類が豊富で、自分の興味に合わせて幅広く学べるのが魅力のひとつだった。



フラの授業で先生と(左が筆者)

夏学期では主に英語のクラスを受講し、毎週エッセイを書くことでライティング力を伸ばした。秋学期になると、ウクレレやフラダンスなど、ハワイならではの文化を学ぶクラスも履修した。秋学期のクラスではローカルの学生と一緒に学ぶ機会が増え、たくさんの

友達ができ、交友関係を広げることができた。ネイティブの学生だけでなく、韓国や中国など、様々な国から来た留学生とも交流でき、年齢やバックグラウンドの異なる仲間と過ごす日々はとても刺激的だった。放課後は演劇のクラスのみんなと劇の練習をしたり、一緒に演劇を見に行ったりもして、楽しい時間を過ごした。

ハワイでは、イベントやお祝いが日本よりも盛大で、サンクスギビングデーやクリスマスなどの季節ごとのイベントを通して異国の文化を感じることができた。

また、ハワイらしい体験もたくさんした。シュノーケリングでウミガメを見たり、友達にサーフィンを教わってもらったりしたことは、とても思い出に残っている。さらに、アサイーボウルやポケ丼のお店を巡り、ハワイならではの食文化も楽しむことができた。

ギャップイヤーを通して、英語のリスニング力も向上したと感じている。難しい単語が出てくると理解が追いつかないこともあるが、日常会話ならネイティブの話も前よりだいぶ聞き取れるようになった。今後は大学でさらに語学力に磨きをかけ、より高度な英語を学んでいきたい。

8ヶ月の留学だったが、今までの何年間にも匹敵するほど濃厚で充実した日々を過ごすことができた。全く知らなかった文化に触れたことで、ハワイの良さはもちろん、日本の良さを改めて実感した。

また、大学で学びたいことや将来の夢が明確になり、自分の視野や世界観が広がったと感じている。

2025年度から小樽商科大学での生活が始まる。この留学経験のおかげで、授業をはじめ、大学生活の様々なことをより深く楽しめるのではないかと感じている。

将来的には、大学在学中に外国人支援のボランティアやワーキングホリデーにも挑戦し、様々な国で学びながら経験を積んでいきたいと考えている。



クラスメイトと(右端が筆者)

マレーシアでのギャップイヤープログラムを通じた学びと今後の展望

藤原花、山口春菜

マラヤ・ウェールズ大学(マレーシア)

(2025年入学～)

1. はじめに

私たちはギャップイヤープログラムを利用し、マレーシアへ留学した。高校卒業後すぐに大学に進学する道もあったが、異文化に触れ、自己成長の機会を得るため、この選択をした。

ギャップイヤーを選んだ理由の一つには、将来国際的なビジネスに関わりたいという夢が大きく関係している。特に「北海道の食品を海外に広める」ことを目標としており、現地の市場や文化を理解することが重要だと考えていた。

マレーシアは今後も経済発展の余地があり、私たちが早い段階で海外経験を積むのにも適した環境だと感じた。また、英語が広く使われ、多様な文化が共存する社会で学ぶことに魅力を感じたのもマレーシアを選んだ理由である。マレー系、中国系、インド系の人々が共生する環境は、日本では得られない経験をもたらしてくれた。

2. マレーシアでの経験と成果

最初の1ヶ月は、言語や食文化の違いに戸惑いを覚えた。しかし、現地の人々の親切さに助けられ、徐々に適応することができた。

大学の授業では、「ビジネス序章」でマレーシアの企業を分析し、グループで戦略を発表する機会があった。最初は不安だったが、プレゼンテーションを重ねるうちに自信が付き、自己表現力が向上した。

また、週末にはインターナショナルスクールで日本語ボランティアを体験し、言語教育の難しさを実感した。母語である日本語を教える経験を通じて、伝え方を工夫する力が養われた。

3. 大学・社会への貢献と今後の展望

このプログラムを通じて、座学だけでなく実践を通じた学びの重要性を痛感した。特に、自由時間の使い方が成果に大きく影響した。自ら行動し、必要な情報を得ることで、主体的に学ぶ姿勢が身についた。また、現地

のビジネスイベントに参加し、企業インターンや学生団体活動にも積極的に関わった。企画・運営・集客を経験し、チームワークやリーダーシップを学ぶ機会となった。

さらに、ムスリム文化やハラール認証の課題にも触れる機会を得た。2026年には世界の出生率の3分の1がムスリムになるといわれている。マレーシアでの経験を通じて、宗教とビジネスの関係を深く理解することができた。この知識が将来のキャリアに活かせると期待している。

4. 最後に

このギャップイヤーを通じて得た経験を、今後の大学生活やキャリアに役立てたいと考えている。特に、マレーシアでのビジネス経験は貴重な財産となった。私たちの夢である「北海道の食品を海外に広める」目標に向け、この経験を活かしていきたい。

また、現場で学ぶことの大切さを実感した。机上の学習だけでは得られない気づきがあり、未知の環境に飛び込むことで新たな視点を得られる。

これからギャップイヤーを考えている後輩たちには、ぜひ挑戦してほしいと思う。未知の環境に飛び込むことで、自分の可能性を広げ、成長する機会が無限に広がると必ず実感できるだろう。



クラスメイトとランチ(手前左側から筆者2名)

教育支援部門

4月

- 前期授業開始(4/8～)：遠隔授業サポート
- (学部)新入生アンケート

5月

- (アントレ) FDワークショップ

6月

- (アントレ) 授業評価アンケートの集計結果に基づく教員の自己評価
- (アントレ) 授業参観

7月

- (学部) 授業改善のためのアンケート
- (アントレ) 前期授業評価アンケート

9月

- 北海道FDSDフォーラム(主催：北海道地区FD・SD推進協議会)参加

今年度の北海道FDSDフォーラムは、実行委員校として、分科会「コロナ禍を経た遠隔授業の現在とこれから」を担当した。また、このフォーラムでは、本学から、西出崇IR室教授と小林友彦企業法学科教授が事例報告を行った。



分科会「コロナ禍を経た遠隔授業の現在とこれから」で事例報告を行う西出教授と司会の田島教授



分科会で事例報告を行う小林教授

- 東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会(秋田大学)の参加
- 札幌市立高等学校の高大連携協定に係る連携事業
- 後期授業開始(9/25～)：遠隔授業サポート
- FDワークショップ(9/25)：本学教職員、博士後期課程学生対象

今年度は、FDワークショップ『データで読み解く小樽商大生 2024』を開催した。ワークショップでは、教育支援部門で実施している新入生アンケートや卒業年次アンケート等の各種調査の集計結果を報告し、データから読み取れる学生の学修行動について、ディスカッションを行った。本ワークショップは、計33名が参加した。



FDワークショップの様子

10月

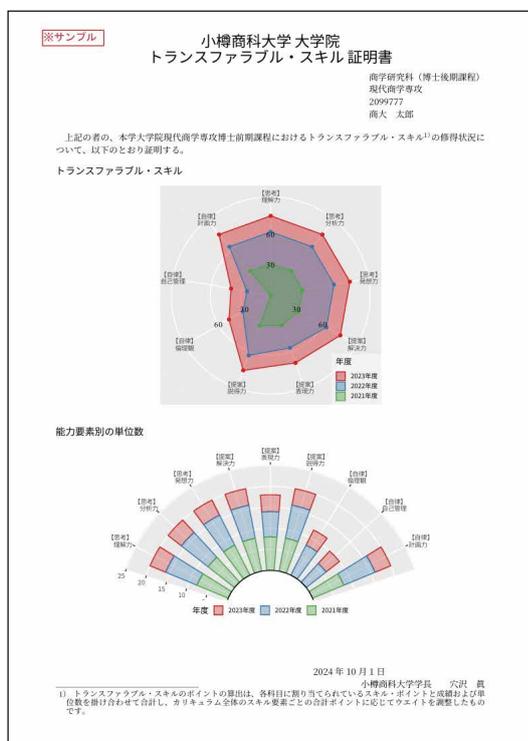
- (大学院) FDアンケート(院生対象)

教育支援部門

11月

- 学生論文賞第一次審査(プレゼンテーション)
- (学部)卒業年次アンケート
- (大学院)トランスファラブル・スキル証明書作成
- (アントレ) FDワークショップ
- (アントレ)後期授業参観
- (アントレ) 授業評価アンケートの集計結果に基づく教員の自己評価

今年度から、大学院現代商学専攻の学生に対し、「トランスファラブル・スキル証明書」の発行を開始した。これは、大学院で学んだ内容に関して、「社会で広く活用できる汎用的なスキル(トランスファラブル・スキル)」の修得状況をチャートのような形式で可視化して証明するもので、大学院生の自己研鑽や就職活動等において活用するものを想定したものである。



トランスファラブル・スキル証明書(見本)

12月

- (大学院)修了生アンケート
- (アントレ)後期授業評価アンケート

- 卒業生アンケート調査(2014(平成26)年度、2021(令和3)年度卒業生対象)

1月

- (学部)授業改善のためのアンケート
- 学生論文賞最終審査

2月

- 学生論文賞最終結果発表

3月

- 大学コンソーシアム京都FD・SDフォーラム参加
- 学生論文賞実施の北洋銀行への報告
- 学生論文賞表彰式
- FD活動報告書作成



学生論文賞実施の北洋銀行への報告



学生論文賞表彰式

グローバル教育部門

4月

- 北海道未来人材応援事業(学生留学コース)募集
- 短期留学プログラム(9月受入)募集
- 第9期グローバルマネジメント副専攻プログラム(GMP)新規所属者募集
- 前期事情科目及び語学研修(夏季派遣)募集
- 社会連携実践Ⅰ～Ⅲ実施(プログラムにより半期または通年)
- 交換留学第Ⅰ期出発

交換留学第Ⅰ期はドイツに合計2名を派遣した。

5月

- グローカルセミナーⅡ(緑丘アカデミア等外部非常勤講師との連携)実施
- 交換留学(2024第Ⅲ期及び2025第Ⅰ期)募集

8月

- 語学研修(夏季派遣)出発

語学研修は、オーストラリア、ニュージーランド、マレーシア、英国に合計9名を派遣した。

- 2023-2024短期留学プログラム終了



短期留学プログラムフェアウェルセレモニー

- 交換留学第Ⅱ期出発

交換留学第Ⅱ期は韓国、台湾、中国、ベトナム、マレーシア、オーストラリア、スペイン、ドイツ及び米国に合計19名を派遣した。

9月

- 第9期グローバルマネジメント副専攻プログラム(GMP)開始

- 2024-2025短期留学プログラム開始



短期留学プログラム入学式

10月

- 短期留学プログラム(3月受入)募集
- 後期事情科目、語学研修(春季派遣)募集
- 国際交流週間

11月

- 国際交流会館・輝光寮防災訓練
- グローカル総合入試実施

グローバル総合入試の結果、一般枠(18名)、理系枠(1名)の計19名が合格した。

- 交換留学(2025年度第Ⅱ期)募集

12月

- ギャップイヤープログラム参加者選考試験実施

ギャップイヤープログラム参加者選考試験の結果、4名が合格した。派遣先は米国(ハワイ)、ニュージーランド及びオーストラリア。

2月

- 交換留学第Ⅲ期出発
- 後期事情科目、語学研修(春季派遣)出発

交換留学第Ⅲ期はオーストラリア、ニュージーランド、マレーシア及び英国に合計4名を派遣した。

語学研修は米国、英国、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、フランス及び韓国に合計19名を派遣した。

産学官連携推進部門

4月

- スタートアップ・エコシステム形成支援 高校生向けアントレプレナーシップ教育プログラム展開
 - ▶ ニセコ高等学校にて実施(4月～1月)
 - ▶ 湧別高等学校にて実施(4月～8月)
 - ▶ 中標津農業高等学校にて実施(4月～6月)
 - ▶ 帯広三条高等学校にて実施(4月～7月)
- 北海道病院経営アドミニストレーター育成拠点シンポジウム開催
- コープさっぽろ提供講座「経営学特講:北海道未来学」講座運営支援



本講義は社会を牽引するソーシャルイノベーターやビジネスリーダーの育成を目的とし、経済界、研究機関、行政機関、国際機関などから著名なオピニオンリーダーを講師として招聘し、「これからの北海道のビジネスの可能性」をテーマにご講演いただくオムニバス形式の講義。

- 「北海道産業論 I」開講
- 財務省北海道財務局との共同研究実施「企業の森づくり活動による森林利活用の実態調査」

5月

- スタートアップ・エコシステム形成支援 高校生向けアントレプレナーシップ教育プログラム展開
 - ▶ 小樽潮陵高等学校にて実施(イノベーションキャラバン)
 - ▶ 中標津高等学校にて実施(5月～10月)
- ニセコ創業フォローアップセミナー実施

6月

- スタートアップ・エコシステム形成支援 高校生向けアントレプレナーシップ教育プログラム展開
 - ▶ 長沼高等学校にて実施(6月～2月)
- 中標津町産業経済構造調査受託事業 開始

7月

- 2024年度HSFC起業人材及び起業支援人材育成プログラム 開催(7月～2月 全8回)

GAPファンドを通じて起業を目指す研究者、大学院生、及び北海道内の大学・高専における起業支援人材を対象に、スタートアップ創出に必要な知識・ノウハウの習得を目的とした全8回の人材育成プログラムを、道内6か所の主要都市にて開催した。

本プログラムでは、ファイナンス、法律、税務、知財戦略、人材・組織開発、コーポレートガバナンスなどの分野において、スタートアップやアカデミアに深い知見を持つトップクラスの専門家を講師として招聘し、実践的かつリアルな知識を提供した。さらに、講義に加えて、各専門家による個別メンタリングも実施し、受講者の具体的な課題に対する助言を行った。



- 北洋銀行ものづくりサステナフェア2024出展(ACE及び3大学)
- 履修証明プログラム「病院経営アドミニストレーター育成プログラム」開講(7月～2月)
- 溪仁会「経営マネジメント力養成研修会 ベーシックコース」(7月～12月)、「アドバンスコース」開講(10月～11月)

8月

- 倶知安ビジネススクール2024開講(8月～10月)

産学官連携推進部門

9月

- スタートアップ・エコシステム形成支援 高校生向けアントレプレナーシップ教育プログラム展開
▶音更高校にて実施(9月～3月)
- スタートアップ・エコシステム形成支援 アントレワーキングキャンプ地域課題解決ビジネス考案in音更(夏合宿)実施
- 国立大学法人共同研究センター等教員会議(名古屋工業大学)
- 北海道病院経営アドミニストレーター育成拠点オープンセミナー実施(公益社団法人日本医療経営コンサルタント協会北海道支部との共催)
- 「地域医療マネジメントセミナー」(本学主催)アントレ「特殊講義Ⅱ」開講(9月～1月 全8回)※アントレ正規生のほか、地域医療機関から受講生を受入(有料)

10月

- スタートアップ・エコシステム形成支援 高校生向けアントレプレナーシップ教育プログラム展開
▶酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校の来学に係る講義実施
- 榎本石鮪プロジェクトのクラウドファンディング支援(10月～12月)
- ニセコビジネススクール2024開講(10月～11月)
- 中標津ソーシャルイノベーションスクール2024開講(10月～2月)
- 国立大学法人産学連携センター長等会議 参加

11月

- ビジネスEXPO出展(ACE及び3大学)
- Matching-HUB Hokuriku出展(ACE及び本学)
- COI-NEXT“オアソビプロジェクト”市民参加型イベント実施

● 令和6年度産学官ビジネスセミナーin湧別町 開催

「令和6年度産学官ビジネスセミナーin湧別町」を開催した。本セミナーでは、産学官連携による地域の産業競争力向上を目的とし、循環型ビジネスに関するオホーツク地域の企業様、そして行政等との連携を通じ、サーキュラーエコノミーに関するイノベーション創出事例を共有。オホーツク・湧別町での課題や今後の展望について活発な議論を深めた。



12月

- スタートアップ・エコシステム形成支援 アントレワーキングキャンプ地域課題解決ビジネス考案in音更(中間発表会)実施

2月

- Hokkaido Innovation Weekサイドイベントである小樽イノベーションウェーブ開催
- スタートアップ・エコシステム形成支援 アントレワーキングキャンプ地域課題解決ビジネス考案in音更(最終発表会)実施
- 令和6年度産学官連携フォーラム

3月

- Matching-HUB全国展開推進会議
- HSFC-DAY参加
- 提携コンサルタント会議(札幌サテライト)開催
- オープンイノベーションセミナー「産×学×官で北海道の未来を共創する～新しい健康社会の実現に向けた北海道におけるヘルスケアイノベーション～」(ACE主催、本学共催)実施

研究支援部門

4月

- グローカルプロジェクト推進公募開始(募集期間：3月27日～4月26日)
- コンプライアンス研修 研究倫理研修(新任教職員・大学院新入生対象)
- 令和6年度研究支援部門支援事業 募集開始
 - ◇ 国際学会等発表支援
 - ◇ 学術論文外国語添削料補助
 - ◇ 大学院生学会等発表支援
 - ◇ 科研費A評価再チャレンジ支援
 - ◇ 登録研究会支援
- 重点領域研究支援事業を開始

2月

- 研究不正防止講演会
- コンプライアンス研修(全教職員対象)

3月

- 令和7年度研究支援部門 支援事業募集開始
 - ◇ 国際学会等発表支援事業
 - ◇ 学術論文外国語添削料補助
 - ◇ 大学院生学会発表支援
 - ◇ 科研費A評価再チャレンジ支援
 - ◇ 登録研究会支援

8月

- 科研費申請書作成支援(民間URA機関による添削)
- 令和6年度科研費交付決定者対象説明会開催(オンライン)
- 研究活動スタート支援再チャレンジ支援募集開始
- 三大学合同令和6年度科研費セミナー開催(オンライン)

1月

- 令和7年度研究支援部門 支援事業募集開始
 - ◇ 重点領域研究支援事業



グローバルプロジェクトにおける市民向けイベントでの学生登壇の様子

受講者が発案したプロジェクト

①「若者の移住×ウェルビーイング」
NFT履歴書やトークン報酬を活用し、フリーアコモデーション(free(自由) + accommodation(宿泊施設))、ワーケーション、二拠点生活を促進する。移住者が地域で活動しやすい透明性の高い仕組みを構築し、魅力的な地域づくりを目指す。

②「小樽の観光活性化×ウェルビーイング」
坂を登ることで得点が溜まり、スタンプラリーや投稿ポイントで特典が得られる仕組みを導入する。坂を観光資源として活用し、訪問者や住民が坂を好きになることを目指す。

お乳トークンの例：
ストアで10%割引の特典を付ける、などの機能を定めることも可能→実証済み

OTARU UNIVERSITY OF COMMERCE

グローバルプロジェクト成果報告会の様子

グローバルプロジェクトは、グローバル時代における地域(北海道)の教育研究拠点として、地球規模の視野で考え、地域視点で行動するグローバル人材の育成に資する教育研究プロジェクトを学内公募し、研究費を助成している。

教育ビジョン・研究ビジョン・社会貢献ビジョンの3つのミッションに資するプロジェクトを対象とし、全学的に公募を行い、プロジェクトを実施した。(実施したプロジェクトの詳細は、P25参照。)

2024年度「グローバルプロジェクト推進公募事業」採択・実施事業一覧

CGSでは、本学の中長期ビジョン・戦略に資するプロジェクトに対して助成を行う学内公募事業「グローバルプロジェクト」を実施しています。2024年度に実施した事業は以下のとおりです。

採択プロジェクト名	プロジェクト代表者
区分A (1件あたり50万円を上限)	
自由貿易と地域産業—後志地域の国際的課題解決に向けて—	企業法学科 准教授 張 博一
Web3×地域課題解決プロジェクト ～ウェルビーイングの新たなかたちの探求～	アントレプレナーシップ専攻 准教授 藤原 健祐
区分B (1件あたり25万円を上限)	
北海道内の農林水産業の若年化と国際化のための課題： 育成就労制度の活用のための比較分析	企業法学科 教授 小林 友彦
北海道特産の山菜（チシマザサのタケノコ）の生産性と 味を決める要因の解明	一般教育系 教授 片山 昇
大学院生によるシステマティックレビューの 学際的アクティブラーニング	商学科 教授 鈴木 和宏 准教授 木田 世界
『地域アントレプレナー育成合宿』プロジェクト	学生支援課 特定専門職・UEA 高山慎太郎
小樽市における長寿企業の経営理念と人材育成戦略に関する研究	商学科 准教授 戴 秋娟



小林友彦教授が代表を務めた「北海道内の農林水産業の若年化と国際化のための課題」では、学生主導で、道内の若年層の就労増加や国際化の推進という課題に関し、若年層の流出を防ぐための「教育」の基盤強化と、アグリツーリズムのような「観光」との連携に焦点を当てた。具体的には、①小樽市内の高校生の放課後学習スペース・異文化交流の場作りと雇用創出のための起業と、②農業・酪農・畜産を基幹産業とする音更町のインバウンド対応を含む観光振興課題の分析に取り組んだ。

このうち、音更町の観光振興に関しては、町内2か所にある道の駅において学生が現地調査を行った（音更町から資金援助頂いたことに御礼申し上げます）。観光客へのアンケート調査や同町関係者へのヒアリング調査も実施し、そこから得られた実践的知見やデータを整理・分析した。その成果は、道の駅の運営に関する改善提案として音更町長・職員の前で発表した。育成就労制度は受入れ枠を地方に優先的に配分する方向であることから、道内経済への影響について引き続き検討する。

グローバル教育・研究活性化基金のご案内

2022年4月、全学的な研究支援組織であるグローバル戦略推進センターを通じて本学の目標・戦略を達成することを目的として教育、グローバル教育・研究活性化基金を設立しました。

この基金は6つの使途から指定いただくものですが、「その他基金の目的達成に必要な事業への支援」とすることも可能です。2024年度につきましては、3件13,100,000円の寄附をいただきました。

6つの使途



使途 1

本学のグローバル教育活動への支援

本学では、グローバルな視野のもとローカルな視点から考え行動できる「グローバル人材」の育成に取り組んでいます。いただいたご支援は、学生がグローバル・ローカル双方の力を身に付けるための学外学修プログラムや、学生発スタートアップの支援等に役立てられます。



使途 2

本学の研究活動への支援

本学は単科大学でありながら経済学、商学、法学、情報科学、語学、人文自然科学等の多様な研究領域を有し、それらを生かした北海道・地域の課題解決に資するグローバル研究を強みとしています。いただいたご支援は、本学の北海道における研究拠点としての機能強化や、地域の具体的な課題に取り組むグローバル研究プロジェクト等に役立てられます。



使途 3

特定の企業等と行うプロジェクト事業への支援

いただいたご支援を活用し、寄附者(企業等)の目的に応じたプロジェクトを共同で実施します。



使途 4

本学が組織的に取り組む産学官連携・地域貢献活動への支援

本学は、企業・自治体との共同研究や、ニーズに応じたセミナーや教育プログラムの実施等、産学官連携・地域貢献活動に積極的に取り組んでいます。いただいたご支援は、本学が産学官連携で取り組む共同研究課題への助成や、産学官連携による教育プログラム(本学学生のみならず地域住民等を対象とした学び直し)の実施等に役立てられます。



使途 5

本学の施設・環境整備への支援

本学では他大学に先駆けてアクティブラーニングを推進し、教室や機材の整備を行ってきました。現在はコロナ禍によりオンライン教育が急速に普及しています。いただいたご支援は、こうした学びの多様化に対応する教室やICT機器等の学修環境の整備に活用されます。



使途 6

本学のブランド力向上への支援

本学商学部は国公立大学最大の経済・商学系学部として、北海道内を中心に安定した入試倍率、高い就職率を誇ります。全国でのさらなる認知度向上を図り、より多様な人材が集まるキャンパスを実現するため、いただいたご支援は、本学の広報事業や周年事業に活用させていただきます。

データ集

こちらのデータ集では、2024年度におけるCGS各部門の成果等やIR室がデータ収集・分析等したデータの一部について、IR室から紹介します。

1. 研究・産学官連携

産学官連携推進部門では、本学の開学以来の産学官ネットワークを活用し、学内の研究シーズと学外ニーズのマッチングを行うことで共同研究や受託研究に繋げてきました。(図1、図2)

研究支援部門では、科学研究費助成事業(科研費)の申請に対する支援や国際学会での発表支援等の教員の研究活動への支援事業を行っており、科研費の獲得に繋がっています。(図3)

また、産学官連携推進部門では、道内外の企業、行政機関及び業界団体等からの相談に応じる「ビジネスサポート」を実施しています。ビジネスサポートの質向上、対応分野拡充のため、本学ビジネススクール出身者を中心とする提携コンサルタント(弁護士、税理士等のスペシャリスト12名(2025年3月末現在)を組織しており、相談件数は例年30件を超えています。(図4)

図1 研究助成としての外部資金獲得額(合計)

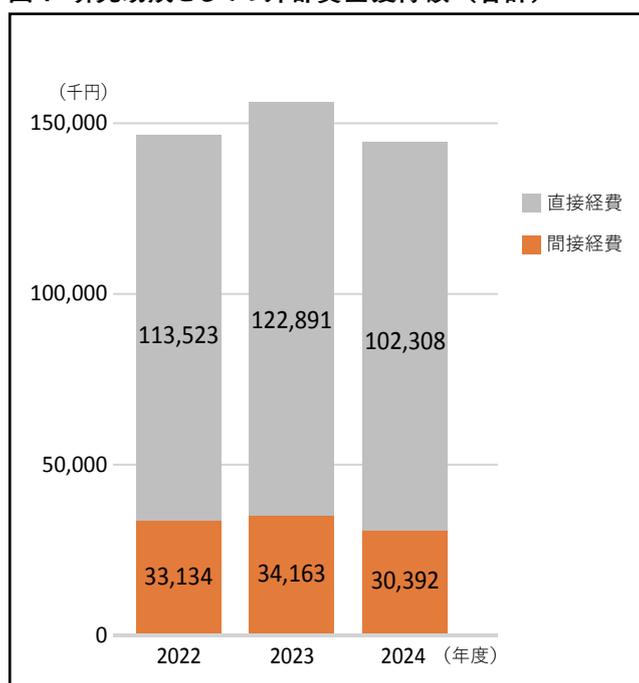


図2 研究助成としての外部資金獲得額(科研費を除く)

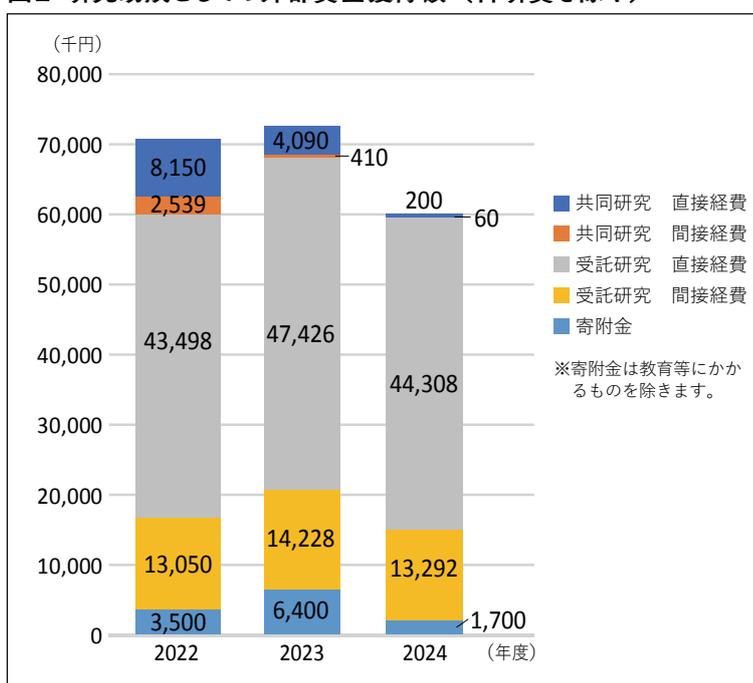


図3 研究助成としての外部資金獲得額(科研費)

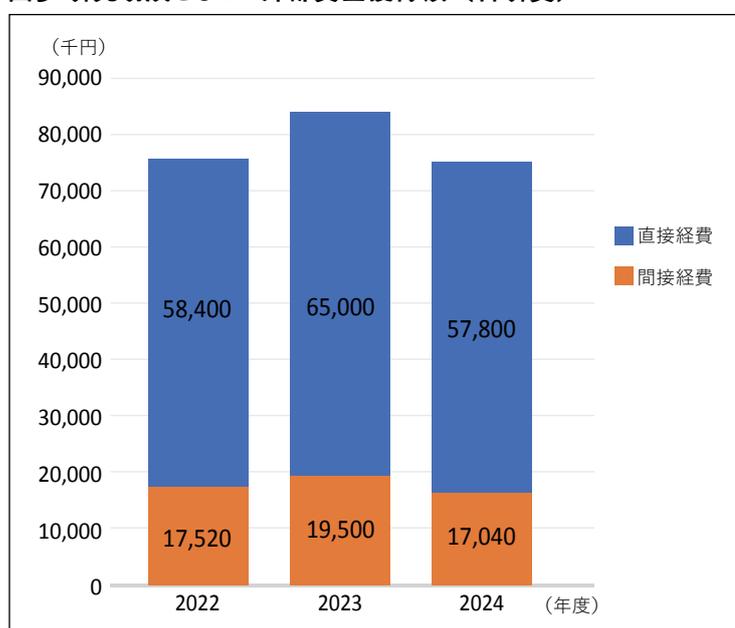
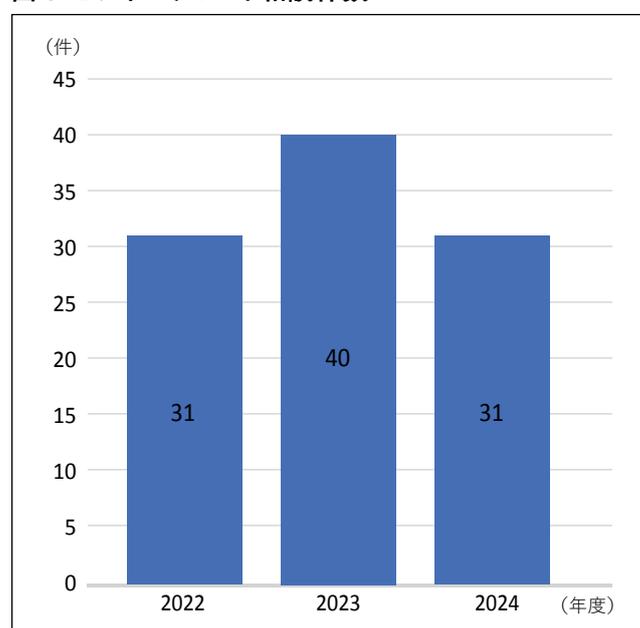


図4 ビジネスサポート相談件数



2. 留学

これからの社会で必要とされる国際感覚や異文化を理解する力を養うため、グローバルコースに所属する学生はもちろん、より多くの学生に海外留学を経験してもらいたいと考えています。本学では20か国・地域、28大学と留学協定を結び、4週間以内の短期留学や最長1年間の長期留学など様々な留学制度を用意しており、様々な国・地域へ学生を派遣しています。また海外の協定校等からの留学生を受け入れ、キャンパスの国際化を進めています。

図5 派遣学生数（2024年度）

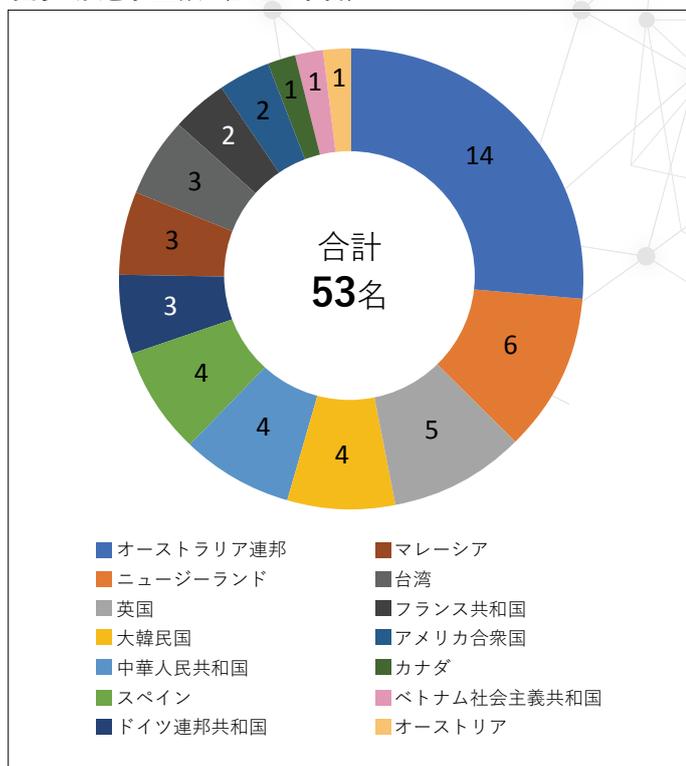
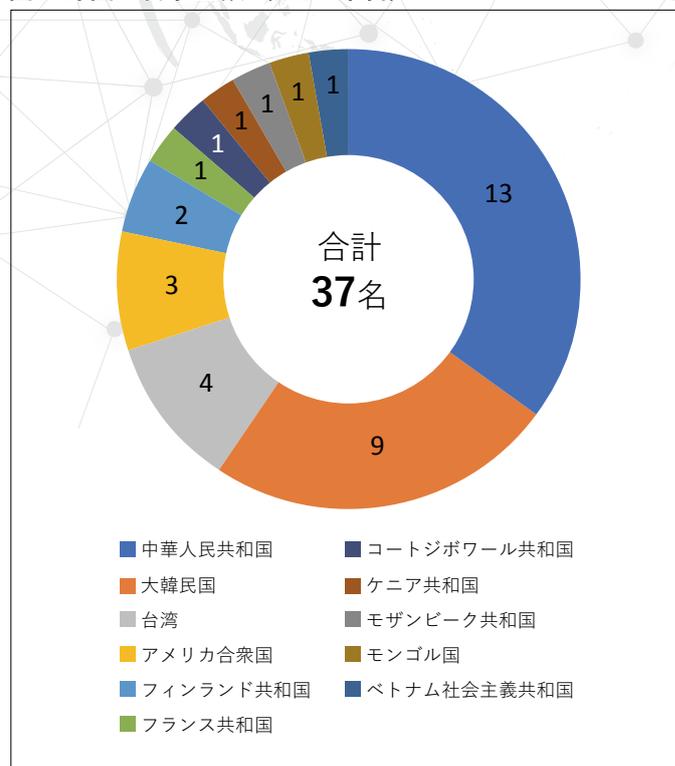
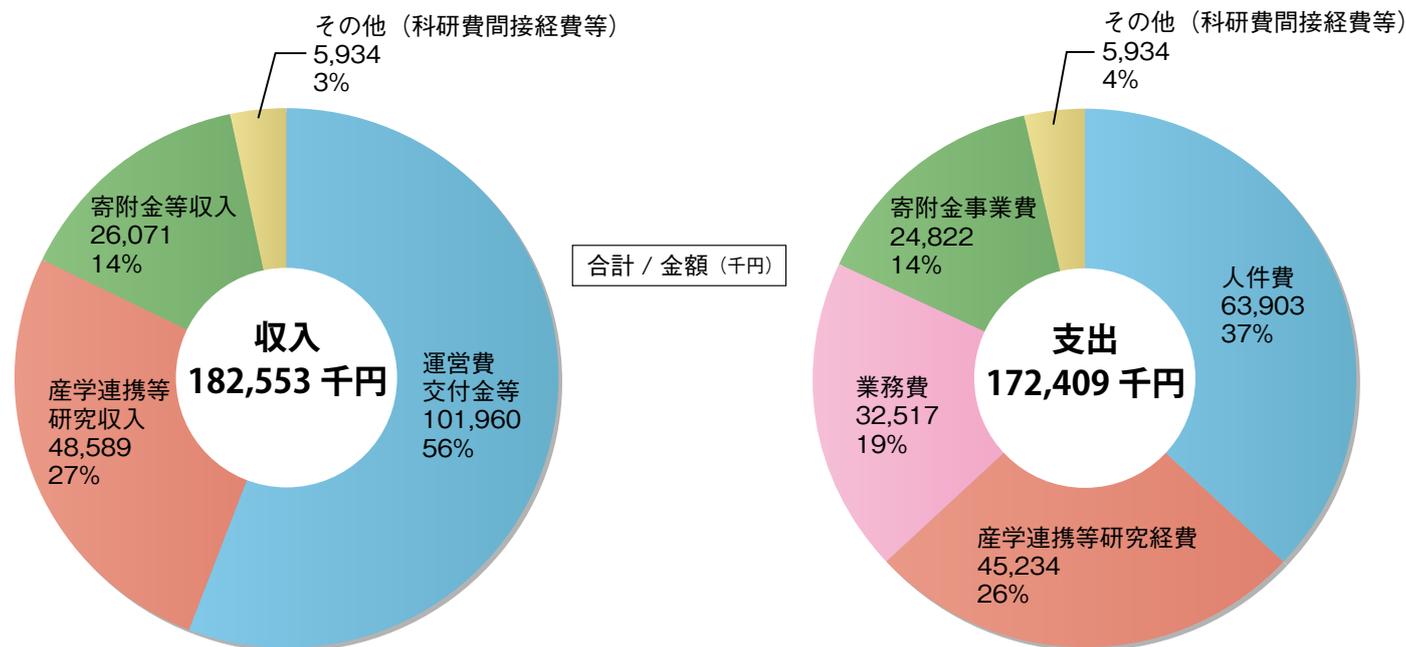


図6 外国人留学生数（2024年度）



CGS 関係予算収支



CGS

Annual Report



グローバル戦略推進センター コラボルーム【Cs】

産業界等のステークホルダーが集い、学生や教職員との対話を通じて、北海道の活性化に向けた新たなアイデアを見つけ出す場として活用。

※【Cs】とは、想像 (creation)、挑戦 (challenge)、商業 (commerce)、協力・連携・共同作業 (collaboration) の頭文字である「C」と企業、大学が持つ新しい技術・材料・サービス (seeds) と需要 (need) を掛け合わせた愛称。



グローバルラウンジⅠ

様々な学生が多言語、異文化理解を深めるための拠点として活用。



グローバルラウンジⅡ

少人数によるグループワークなどを行うスペースとして活用。

小樽商科大学グローバル戦略推進センター年報 2024
2025年6月発行

小樽商科大学グローバル戦略推進センター
Center for Glocal Strategy
〒047-8501 北海道小樽市緑3丁目5番21号
<https://www.otaru-uc.ac.jp/cgs/>